

## 「In the Flow: Onomichi and Korea」

### 流れの中で：尾道と韓国

小野 環

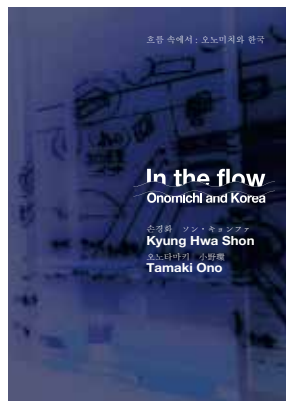
これまで尾道と韓国との関係についてはあまり知られてこなかった。AIR Onomichiの実践や尾道空き家再生プロジェクトにおける継続的な地域史に関するリサーチのなかで、韓国と尾道の間をめぐる証言やいくつかの事物などの断片が明らかになったが、それらは極めて曖昧なものであった。

共同研究プロジェクト「In the flow:尾道と韓国」は偶然始まった。2022年夏、RCA(ロイヤルカレッジオブアート)と尾道市立大学との共同プロジェクト“Re-&De-”※に関連して行ったフィールドワーク時に、小野が、尾道に残されている朝鮮半島に関連した場所や出来事についてRCAの教員のソン・キョンファに説明したのがきっかけであった。しかし、その時点でその内容は知人からの伝聞や、地域史の関連書籍に掲載されていた断片的なものであり、不明瞭なものばかりであった。その後、ソン・キョンファはそれらの実質的内容を調査する共同研究計画を立案し、研究がスタートした。

2023年1月よりズームミーティングを重ね、尾道側でリサーチを開始し、6月にはソン・キョンファは、ソン・キョンミン(インディペンデントキュレーター)と尾道を訪問し、集中的にフィールドワークとヒアリングを行なった。まずは可能性のある断片に一つずつ直接触れていく調査であった。それらは相互関係も見えず、単に韓国と何らかの関係があったというだけのものではあったが、まずは、それをバラバラなまま、発掘可能な部分から掘り進めていくスタートであった。

見通しが効かない中、断片からコツコツと事物を掘り進めていくリサーチのプロセスは、2023年に生野銀山※の坑道(トンネル)を訪れた時の空間体験と頭の中で重なり合う。これは地中に眠る鉱脈をめざして縦横に複雑に掘られた坑道跡をたどる経験であったが、坑道の掘りはじめを想像すると気が遠くなる。鉱脈に当たることを期待しつつ、異なる場所から少しずつ掘り進んでいく。事前調査で予測を立てるとは言え、堅穴やトンネルがどこで鉱脈にぶつかるのかはわからない。地下の堆積層は、褶曲し複雑に折れ曲がっているのみならず断層が走り不連続だ。出来事をめぐる記憶や人間関係にもそれに類似した複雑さや困難さが発生するだろう。とりわけ、戦前・戦中・戦後の朝鮮半島と日本をめぐる状況は現在の私たちの日常のパースペクティブでは捉え難い。その上、厄介なことに、鉱物に比して人々の記憶の風化は思いのほか速い。

このような困難な状況の中、今回のリサーチを展開していった。これまで知られていなかった地域の歴史を美術家の目線で探求しようという試みで、その主眼は日本の地方都市「尾道」に眠っている韓国の建築と人々の声と記憶、そして韓日文化交流の痕跡を創造的な方法で追跡し明らかにしていくことにある。



In the Flow 記録集 2023



#### 旧小野産婦人科

1938年、小野鐵之助が病院として建造した木造3階建ての建築。現在NPO法人尾道空き家再生プロジェクトが複合施設「オノツビルディング」としてランニングしている。「瓦全房」はこの建物の裏にある。



#### 瓦全房の看板

小野鐵之助の娘、高橋朋子が岡山県井原市で経営する喫茶店「瓦全房」の中には、当時小野鐵之助が使っていた瓦全房の看板が掲げられている。字は小林和作、漆による看板の制作は高中隆二によるもの。



#### 瓦全房縁起

『小野鐵之助随筆集』の「瓦全房縁起」には、瓦全房が作られた由来が書かれている。

## 旧小野産婦人科「瓦全房」

かつて尾道市十四元町の旧小野産婦人科の裏にはギャラリー「瓦全房」があった。ここには、戦後尾道の文化的発展に寄与した医者、小野鐵之助の父親が朝鮮半島滞在期間に収集していた朝鮮瓦のコレクションが収蔵されていた。『随想尾道』第17号収録「瓦全房縁起」によれば、父親達郎が大正2年に朝鮮に渡り、平壤に30年間ほど暮らし、その中で出土品を蒐集。戦前に日本へ帰り、散逸せず残ったものである。これを鐵之助が引き継ぎ、その後コレクションは岡山県立博物館に寄託されたと言われていたが尾道の人々にとって、その存在は謎のままであった。

この度の調査は、まず関係者 高橋朋子、國友悦男、上野重治氏など当時小野産婦人科と深い関わりを持っていた親族や知人の聞き取りから開始した。これらのインタビューを通じて小野鐵之助の人物像や瓦全房ができるまでの経緯や「五の日会」の実相が明らかになってきた。また臆げながら瓦全房のコレクションの行き先についても少し明確になった。それを受けて、寄託先として最も有力であった岡山県立博物館に連絡したところ、コレクションが博物館の収蔵庫に保管されていることが確認でき、その数量もかなりあることが分かった。現地調査のため、博物館と現在コレクションの所有権を持つ小野重五郎氏（小野鐵之助の三男）にコレクション閲覧許可を得て、担当学芸員の案内に従い、実際に資料の調査を行うことができた（2023年6月16日）。それによって、実際に『小野鐵之助随筆集』に収められた「瓦全房縁起」に記載されていた通り、高句麗時代を中心とした様々な衣装の瓦や埴※を多数（箱で95箱、瓦に関する資料数は537件）確認することができた。（2023年6月）コレクションは想像以上に多様で、数量は多く、保存状態も良好だった。2023年12月から瓦全房で開催した中間報告的展覧会「In the Flow～尾道と韓国」展では会期終盤に小野重五郎氏より朝鮮瓦と埴を岡山県立博物館の協力によりお借りすることができ、瓦全房で展示することができた。少なくとも34年以上ぶりの展示品の帰還となった。

## 旧天野春吉邸

旧天野春吉邸は尾道旧市街の斜面地に立地し、「天春（てんはる）の石垣」と呼ばれる非常に豪華な石垣で知られ、現在はインドの世界的建築家スタジオムンバイの手により「LOG」という複合施設として生まれ変わっている。その土地はかつて韓国南部釜山近くの金海で大農場を営んでいた天野春吉が大正元年1912年ごろ亀山家より購入し、石垣と千光寺新道を建造し開かれたものである。春吉の孫が当時の天野家の様子を描き残した図面には、母屋と蔵三棟、現在も残されている寄棟の離れ、さらにオンドルが描かれている。朝鮮半島との関係性を考える上で、特に注目すべき建築はオンドルである。このオンドル建築について具体的に調べるために「尾道の茶園建築における近世から近代の変遷に関する研究」を執筆した竹原和秀（広島工業大学大学院建設工学専攻）に資料共有をお願いして、インタビューを行った。（2023年6月）竹原によるとオンドルの建物は朝鮮の建物を日本に持ってきて再建された可能



瓦全房関連リサーチ



朝鮮瓦 高句麗時代 小野重五郎氏所蔵



旧天野春吉邸再撮影プロジェクト

左：天野家親族提供、右：撮影ソン・キョンファ



性があり、その場合、資材だけでなく当時の朝鮮のオンドル職人  
たちを尾道に連れてきて建てられた可能性が高いという。オンド  
ルシステム を備えた事例は尾道ではもちろん、他に類例を見ない  
ものであることからそのような推測に至っている。現在のところ親  
族の書いた図面以外に当時の状況を推測する手がかりがないため、  
竹原は一般的な韓国伝統民家様式を参考にしてオンドル建築図面  
を作成した。

当時尾道と韓国、とりわけ釜山は非常に近い距離感にあった。2  
航路が開設され、天野家の末裔の方の証言によると天野家の人々  
はかなり頻繁に尾道と韓国を往復していたという。その後、不幸な  
事故(家財道具一式を韓国から運搬していた時、機雷によって運搬  
船が沈没してしまった事故)によって、財産が失われてしまったこ  
ともあり、天野家の記録はわずかしか残されていない。今後も尾  
道側と韓国側の相互協力を続け、この天野家の歴史や失われた建  
築に関するリサーチを継続していく計画である。

### 高橋家

尾道出身の脚本家高橋玄洋氏の実家でもあるこの家は、玄洋氏  
の父、高橋武氏が戦後朝鮮半島から引き上げ、尾道市役所に就職  
してのち購入した家である。この家には武氏が自身の体験や記憶  
をもとに書き始めていた第二次世界大戦終戦直後の北朝鮮の様子  
を記した手記(小説の原稿のようでもある)が残されていた。武氏は  
1940年広島大学を卒業後、平壤の師範学校の教頭に就任。以降、  
終戦後まで釜山、新義州で教育行政に関わる。1942年に釜山に、  
1945年の終戦時には新義州にいた。1947年、武氏は内地帰還者  
700人余りの団長として5隻の船で帰国。

朝鮮半島での経験は断片的にしか記されておらず、幼い時、家  
族とともに朝鮮半島に滞在していた息子玄洋氏も90歳を超え、さ  
らなる証言の聞き取りが必要とされる。この度の調査では、高橋家  
で長年プロジェクトを展開してきたアーティスト、横谷奈歩の聞き  
取りを行い、これまでの調査の中で明らかになってきた、高橋家の  
歴史について詳細に聞くことができた。また、現場調査で戦前の  
高橋家の様子を確認できる資料を探した結果、武氏が釜山で滞在  
時に作成したはがきを発見することができた。

### 小林和作旧居

NPO法人尾道空き家再生プロジェクトが取得した小林和作旧居  
には和作が集めた家具が比較的多く残されている。そのうちのいく  
つかには、異国情緒を放つものがあったが、その来歴については  
特に調査したことはなかった。しかし、今回の調査を通じてそのい  
くつかの来歴が明らかになってきた。例えば小さな円形テーブルは  
韓国で非常にありふれた食卓である「ソパン」で、小さな引き出しが  
たくさんあるついた家具は薬棚だ。調査の中で、棚板の裏面にハ  
ングルで印刷された印刷物が貼られていることを確認した。一方、  
別の棚帳(おそらく朱の漆で仕上げられたもの)の場合、その歴史  
的な来歴や様式を特定できなかったが、この棚帳の引き出しの底  
面にハングルで印刷された印刷物が付着していることが確認でき



高橋武による釜山転居時に印刷された郵便はがき



小林和作旧居に残された朝鮮家具



下蒲刈島 松濤園

た。これを考慮すれば、これも韓国産かもしれないその印刷物は、昔のハングルで書かれているため、韓国のアーティスト、ソン・キョンファ氏も解説することはできなかったが、今後、データをもとに解説していく計画だ。

## 朝鮮通信使

「朝鮮通信使」に関する研究は、過去の日本と韓半島の文化的交流関係を把握する上で非常に重要である。鎖国時期、日本(徳川幕府)にとって朝鮮は正式外交を結んだ唯一の国家であり、将軍が変わるたびに通信使と呼ばれる使節が訪れた。漢陽を出発した300~500人余りの一行は釜山までは馬に乗り、釜山からは海路で大阪まで移動し、その後日本の首都江戸まで陸路で移動した。海路で大阪に行く途中、瀬戸内の街、尾道に立ち寄った記録もある。(天寧寺で詠まれた詩がその証し)また近隣の港町、鞆の浦はより頻繁に「朝鮮通信使」が訪れた場所、お寺の随所にそのエビデンスが残されている。福禅寺は弁天島・仙酔島に対する景勝の地にあり鞆の浦に寄港した朝鮮の正使・副使・従事などの宿所に当てられた。正徳元年(1711)李邦彦の「日東第一形勝」の書をはじめ、寛延元年(1748)洪景海の書する「対潮楼」の扁額など多くの資料が残る。通信使の経路はほぼ一定しており、鞆には計12回の通信使が宿泊している。アーティスト、ソン・キョンファは、前回の滞在の際、福善寺を訪れた。今回は朝鮮通信使を歓待したことで有名な呉市下蒲刈島の松濤園にある朝鮮通信使資料館である御馳走一番館を訪れ、〈鮮通信使行列と絵画〉の展示を観覧し、その後関連施設を訪れた。

## まとめ

見通しが立ちにくい中、2023年6月以降、尾道側と韓国側のアーティストが出来事を共有しながら展開した現地でのリサーチは研究協力者の助力により、当初の予想以上に進展した。当時を知る幾人かの重要な人々への聞き取りを通じて、不明瞭であった出来事に徐々に具体的な手触りが出てきたのだ。その脈に沿ってリサーチを進めていく中で、これまでベールに包まれていた瓦全房のコレクションには岡山県立博物館で直接触れることができ、その希少性と重要性を確認することができた。また、旧天野春吉邸ではそこに存在したと言われるオンドルの跡地に立ち、小林和作旧居、高橋家では朝鮮半島と尾道の関係を示す物的証拠を発見することができた。またこれまでのリサーチの中間報告的な展示として、瓦全房で2023年12月~2024年1月にかけて展覧会を開催した。

事物を複数視点で観察し、経験し、そして考察することでそれぞれの死角にあるものに気づくことができる。「文化の三角測量」とは人類学者、川田順造がアフリカ、フランスと日本の3カ国のフィールドワークを通じた文化研究を行う手法について用いた言葉だ。2つの文化圏の比較検証に第三項を導入し、より立体的でダイナミックな文化研究を行う方法論である。それとは規模感も手法にも違いはあるものの、私は常々、アーティスト・イン・レジデンスのプ

ログラムもこの「三角測量」の構造に類似した性質を持っていると考えている。異なる文化圏からアーティストを招き、「つなぎ手」として創作研究活動の現場を共有することで、新たな視点が生まれ、対話的な創作が展開されるのだ。フィールドワークやヒアリングの現場は、「対話」を超えた「トライアログ」=三角形の形を成し、リサーチの視野が線から面へと拡張する。活動の中で新たに発見されるのは、双方ともこれまで見えていなかったものであり、その場所に潜在していた事物であると同時に、それぞれの文化圏の内側で無意識化されていた層だ。

「よそ者」としてのアーティストの視座が、「つなぎ手」としてのアーティストとの対話を通じて、これまで試みられることがなかった新たな角度からのリサーチを可能にしたと言えるだろう。

断片的なものを一つ一つ繋いでいくかの角度から観察することで、地域の記憶の扉が開き始めた。しかし、まだ私たちは計り知れないスケールと形状を持つ鉱脈の入り口に立ったに過ぎない。今後、この動き始めた流れの中にさらに潜っていくことにより、これまで語られることのなかった尾道と韓国との知られざる歴史が明らかになっていくことだろう。

注

※“Re-&De-”

RCAと尾道市立大学との共同プロジェクトギャラリー・クロフ、ソン・キョンファ、稲川豊、小野塚を中心に推進している創作・教育プログラム。

※生野銀山

兵庫県朝来市に開かれていた1200年の歴史を持つ日本有数の銀山。

※磚

東洋の建築材料の一つ。煉瓦、タイルなどに類するもの。粘土を型に入れて成形し、乾燥させたものと焼いたものがある。

※川田順造(1934年~)

日本の人類学者。西アフリカの各地で実地調査、無文字社会の歴史と文化を研究。

# In the flow

## Onomichi and Korea

展覧会「流れの中で：尾道と韓国」  
プロジェクトの進捗を紹介する中間報告的な展示として開催。

### 【会期】

2023年12月4日～2024年2月18日

### 【会場】

瓦全房

### 【アーティスト】

ソン・キョンファ

小野環

### 【キュレーター】

小野環

### 【アシスタントキュレーター】

吉田彩花

### 【翻訳】

ソン・キョンミン

### 【出品協力】

小野重五郎

高橋朋子

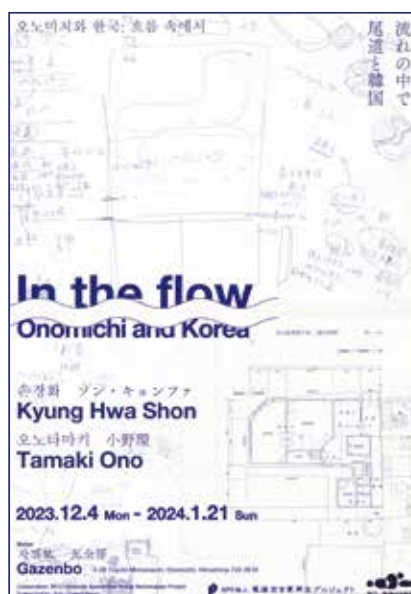
### 【協力】

NPO法人尾道空家再生プロジェクト

岡山県立博物館

### 【助成】

アーツカウンシル韓国



展示フライヤー







ソン・キョンファ《39N 125E》 ケミウッド、シリコン型、石膏 2023年



「In the Flow 尾道と韓国」 瓦全房におけるインスレーションビュー 2023年



朝鮮瓦(小野重五郎氏蔵)は岡山県立博物館の協力で、当初予定の会期末の1月20日より展示可能となったので会期を延長した。